

飛べない鳥は今日も街を駆ける

ふゆやすみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ペンギン急便が活躍する話です。

一部過去捏造が入るかもしれませんが、ご了承ください。

また話はグローバル版準拠です。

こんなものを書いていますですが弊ロドスにはエクシアが居ません。
欲しいです

目次

ペンギン急便①	1
可愛い贈り物①	3
可愛い贈り物②	6
可愛い贈り物③	9
可愛い贈り物④	12
青く燃ゆる心①	15
青く燃ゆる心②	18

ペンギン急便①

「テキサス、そこ右。」

助手席に座るラテラーノ人がそう言ったのでテキサスはハンドルの右に切った。

「ほんっと、こんなただの箱を運ぶだけの仕事、君一人で十分なのに二人で行かせるとはボスもたいがい心配性だよね。おかげで見えなかった番組リアタイ出来なかったよ。」

さつきから隣で文句を言っているのはエクシア。テキサスの同僚であり、友人だ。

彼女が仕事んお文句を言っているのはいつもの事なので話も半分に聞き流してサイドミラーに目を見やる。先ほどから尾行してきている車が居る。

もしあの車に乗っているのが一般人ではなく敵であったとしたならば、仕掛けてくるのは人通りの居ない路地に入った今だろう。

「……エクシア、銃を。」

「オツケー、後ろの車だね。」

注意を促すように言った時にはもう彼女は愛銃を手にしていた。どうやら彼女も後ろの車の異様さには気づいていたらしい。

車が誰も居ない細道に入った時、予想通り後ろの方で銃声がした。放たれた銃弾はテキサス達の車の後輪を貫いたようでも車内に大きな衝撃が響いた。

そのまま車は制御を失い、コンクリートの壁に激突した。

「いったあく、テキサス、大丈夫？」

「ああ……だが車が。」

「車より今は周りの方がヤバくない？」

エクシアの言う通り、テキサス達の車の周囲はすでに包囲されてしまっていた。

「ペンギン急便だな！武器を置いて大人しく外に出てこい！」

外ではリーダー格であろう男が叫んでいる。

「うわあ、完全に私たちを怨んでるって感じの声だよあは。どうす

る?」

「斬り尽くす。」

そう言うや否やテキサスは車のドアを蹴破って外に飛び出した。人数の不利などものともせず二人、三人と切り倒していく。

「もう、ほんと君は後先考えないよね!」

エクシアも銃を手に外に出て次々と敵を撃ち抜く。

二人の息の合った連携によって三分もたたずに包囲してきた輩は人の山と化した。

「みんな急所はちゃんと外したから許してよね。」

人の山に向かってエクシアは言う。

一方、テキサスはスマホを手に電話をかけていた。

「もしもし、ボスカ?……ああ、ちよつと車が壊れてしまつてな。迎えに来てほしいのだが……そうか、助かる。じゃあ十分後にそこで。」

「テキサスく、迎えは来てくれるって?」

気だるそうにエクシアは尋ねた。

「ああ、十分後に九番通りだそうだ。向かうぞ。」

「ええ!?今から歩くの!?もうゆっくりさせてよ。」

「ここもすぐにあいつらの援軍が来る。早く行くぞ。」

「ああもう!わかつたから待つてばあ!」

そうして二人は龍門の街へと姿を消したのだった。

可愛い贈り物①

「はあ、今日もお客さん来うへんなあ。ほんま暇やわあ。」

ミノス族の少女が一人、カウンターに肘を付きたため息を吐いている。

彼女の名はクロワツサン、ペンギン急便の一員であり、ただいま絶賛店番中だ。

しかし、店番と言ってもペンギン急便はその暴力性からわざわざ表立って配達を依頼されることは少ない。仕事のほとんどが電話か何かしらの裏ルートで依頼される。そのため表ルートの店番をしているクロワツサンは白昼堂々ため息をついていたのだ。

「あの、お手紙を送りたいんですけど……」

そんな平和な店に珍しくお客さんがやってきた。クロワツサンは隠すように付いていた肘を直し出迎えた。

「はい！っってお嬢ちゃん、一人か？」

やってきたコータス族の少女はまだ年齢が両手に収まるくらいだった。おもわず親を辺りに探したほどだ。

「うん、おてがみをおくりたくて。」

「そうかそうか、でもうちよりも絶対に普通の郵便屋さんの方が早いと思うで？」

クロワツサンがそう言うのと少女は顔を曇らせた。

「いって見たけど、これはむりだって……」

そう言っただけ少女がカウンターの上に出したのは普通の手紙だった。「何や、最近の郵便屋さんはいらい不親切やな。」

そう言っただけ封筒を手にする。振ってみても何か音がするわけでもなく重さも何も問題はない。しかし、そこに描かれた宛名にクロワツサンは覚えがあった。

「龍門二十二番通り新ビル三階レプテリア様」

ガタガタの幼い文字で書かれてあったその宛名を見てクロワツサンはおもわず聞いた。だした。

「お嬢ちゃん、これ誰に送るつもりなんや？」

「ぱぱ。ここにいるはずってママがいったから。」

龍門で二十番通りから先は基本的に裏街となっており各国から集まったマフィアやギャングが日夜勢力争いを繰り返している魔境だ。普通の郵便局なら確かにこの仕事を引き受けない筈だ。

「やつぱり、だめ……？」

クロワツサンが少し考えこんでいるとお嬢ちゃんが心配そうな声でそう聞いてきた。

「大丈夫やで、お姉ちゃんに任せとき！ただ手紙は一通百龍門幣やけどちゃんと持つとるか？」

「うん！ちゃんとあるよ！」

その小さな手には一枚の硬貨が乗っていた。

「よし、百龍門幣ちゃんと領収しました！おおきにな！」

「で、お前はそのお嬢ちゃんとやらに負けてまんまとこの仕事を持ち帰ってきたわけか。」

少女が来店してきた日の夜は珍しく社宅にメンバー全員が集まった日だった。

「だってボス、お父さんに手紙送るだけやのにわざわざ来てくれてんで？そんななんいくら守銭奴の私かて負けてまうわ。」

言い合っていたのはクロワツサンとボスだ。ただでさえ忙しいのに何の金にもならない仕事を持ち込んできたクロワツサンにボスが怒った、という形で今夜の喧嘩は開戦された。

「それにこんな仕事もこなせへんなんでペンギン急便の名が廃ってしまいうわ！」

「廃って結構。元から大した名前もついてねえんだ、んなもん廃ってなんぼだろ。」

「今夜は結構激しめですね。」

のんきそうに喧嘩を眺めているのはソラ、龍門では人気のあるアイドルでありながらペンギン急便の一員であるという奇抜な二足の草鞋を履く少女だ。

「ほんと、あの二人いつも仲よさそうに話す癖にたまにすつごくぶつ

かるよね。」

エクシアがテレビを見ながらそう言った。隣ではテキサスが我関せずといった表情で同じようにテレビを眺めている。

「はあ、うちのボスはついにプライドまで無くなってもうたんか。エクシアもそう思うやろ?。」

「ええ!?!もうこっちに飛び火させないでよ。」

「そう思うやろ?。」

「ま、まあ二十二番通りなら近いし行ってもいいと思うけどね。」

クロワツサンの庄に負け、エクシアはそう言ってしまった。

「じゃあ分かった、クロワツサンとエクシア二人で今から届けに行つてこい。」

ぶつきらぼうにボスがそう言った。

「よっしゃ!ほなエクシアさっさといくで!。」

「何で私なのさ!。」

ガッツポーズをしたクロワツサンと対照的にエクシアはソファの上でうなだれた様子だ。

「二十二番通りなら近いんやろ?なら余裕やん!。」

「うう、絶対にこの分の手当は貰うからね!。」

可愛い贈り物②

「別に近いとは言ったけどさあ、行くって意味じゃないじゃん！もしこれで手当て出なかつたらこんなブラック企業絶対やめてやるんだから！」

「まあそんなカツカしんとつてや。せや！お礼に今度なんか奢つたるわ！」

「ほんとに!?!やっぱクロワツサンについてきて正解だったよ。」

そう言つて抱きつこうとしてきたエクシアを邪険そうに振り払う。午後九時、龍門にとってはこれから活気ついてくる時間だ。あたりはネオンや屋台の電飾がきらめいている。

しかしそんな喧騒からは遠ざかるようにして歩いていき二人はやがて二十二番通りに辿り着いた。

「えーっと、住所は……ってこれ新ビルまでしか書いてないじゃん！どうするのさー！」

「んなもん探すにきまつてるやろ。」

「……それ本気？」

クロワツサンが黙つてうなずくとエクシアは見てわかる程に肩を落とした。

「大丈夫やつて、ここで事務所なんてゆうても三つくらいやろ。総当たりしてもそんな時間はかからんつて。」

「私たちはそれらすべてからもれなく恨みを買ってるんだけどね。」

ペンギン急便は配達のプロで何かと暴力沙汰に巻き込まれることが多い。しかもそれらすべてをコテンパンに倒しているため多くのマフィアやギャングから目の敵にされている。その結果先日のように襲撃されることも少なくない。

「なんか情報ないの？渡してきた子がどんな子だったかとかさー。」
「コータスの子やった。けどこの辺りコータスの事務所なんてないやろ。」

基本的に龍門では同じ種族で徒党を組むことが主流となっている。ペンギン急便の宿舎にある龍門の地図にはこの辺りの勢力図が描

き尽くされているがクロワツサンの記憶にはそこにコータスの名前は載っていないかったはずだ。

だがしかし彼女と違ってエクシアには心当たりがあるようだった。

「コータス!?!それなら絶対ここだよ!」

そう言つてシヨルダーバッグから地図を出して広げる。

「最近このボスがコータス族に移つたらしいんだよね。なんでも頭脳でのし上がってきた策士らしいよ。」

「ほんまに!?!じゃあまずはこちらで決定やな!」

エクシアが指し示した事務所は幸運なことに数ブロック先にあつた。

「夜分遅くにすんませーん、こちらのボスにお届け物なんですけど。」

クロワツサンはインターホンを鳴らしてそう言った。

「ちつ、表の極道まがいがちに何の用だ。」

暫くして出てきたのは高身長 of 男だった。どうも二人の事を知っているらしい。

「こちらのボスに娘さんからお届け物です。いてはりますか?」

「まずボスに娘なんていねえぞ。どつかと間違えてるんじゃないかな?」

「そんなはずないですつて、ちゃんとコータス族の女の子から受け取りましたもん。」

「はあ?だからと言ってボスの子だとは限らねえだろ。まさかお前ら届け物とか言つて組織を無茶苦茶にしてやろうつてわけじゃないよな?」

「そんな何でこつちが怨み持たなあかんのよ、逆だったらまあ分かりますけどね。」

クロワツサンがそう言ったのを皮切りに玄関先での会話はどんどんエスカレートしていき今に殴り合いが始まったもおかしくない雰囲気だった。

「おい、やかましいぞ!」

突然奥の方で誰かが怒鳴った。と同時に周囲の空気がガラツと変わったのを二人は肌で感じた。

今まで言い合っていた男は突然言葉を失い静かにクロワツサンの前から離れた。

「おい、誰か状況を説明しろ。このガキどもは誰だ？」

「はい、ボス。どうもペンギン急便のやつらしくてなんでもボスに届け物があるとか。」

ボス……と呼ばれたその男の耳は少し欠けていたもののコータス族の物で間違いなかった。

「おいお前ら届け物ってなんだ、俺は別に何にも頼んじやいねえぞ。」
「コータス族の女の子からの手紙や、何でもお父さん宛てらしいんやけどアンタ心当たり無いか？」

クロワツサンにそう言われボスは少し考えこんだ後にハツとした様子で顔を上げた。

「その手紙、見せてもらおう事って出来るか？」

「もちろんええで、ただし丁寧に扱ってな。」

そう言っただけクロワツサンはボスに封筒を手渡した。それを受け取り丁寧な所作で封を開けていく。

中身を少し覗き、確認したのちにボスは何かをこらえるようにして「お前らちよつと付いてこい。」

そう言っただけ奥の部屋へと消えていった。

可愛い贈り物③

「そこに腰かけてくれ。」

いまいちまだ男の事が信用できなかつた二人であつたが言葉に甘えて男の指さした椅子に二人は座つた。

「なんや口車に乗せられて連れてこられたけど、あんたほんまにあの子のお父さんなんよな？」

「ああ間違いない。この手紙は俺宛てだ。これで信じてくれるか？」

そうしてボスは少女が出した封筒の中から写真を一枚取り出した。

「これは……あの子の家族？」

男が取り出した写真は少し昔手紙を出した少女とそのお母さんと思しき人物。そして目の前に座っている男が写つていた。

「ああ、この写真は確か四年位前に家族で旅行に行つたときに撮つたものだ。親切にも入れてくれたらしい。」

「じゃあほんまにアンタはあの子のお父さんなんか。」

クロワツサンがそう言うのと男は少し顔を曇らせた。

「まあ、血縁上はな。実際には親なんて大それた物じゃねえよ。もう何年も家には帰つてない。」

「何でこんなにそれちやつたのさ、写真を見る限りこの頃はまだこの道に足を踏み入れて無さそうだけど。」

今度はエクシアがそう尋ねた。それに対して男は昔を懐かしむように話し始めた。

「借金抱えた友人に逃げられて多くの負債を着せられたのがきっかけだった。初めこそ末端も末端の仕事だったが長く入り浸つてる内にこんなところまで来ちまつた。皮肉なことに裏世界で生きぬく才能みたいなのがあつたんだろうな。」

男の顔には何か諦観の様なものが浮かんでいた。

「もちろんこんな汚れた体で家族が受け入れてくれるわけもねえ、氣付いた頃には二人とも家を出てつたよ。」

そう言つて男はカップに入ったコーヒを一飲んだ。

「あんたも色々苦労してんな。」

痛み入るようにクロワツサンは言った。

「同情なら必要ねえよ、きつかけは何であれここまで歩いてきたのは自分の脚だ。今更そこに言い訳するつもりはねえよ。」

「もう一度会いたいとは思わんの？」

「そりやな、今じゃどこ行くにも周りに人が必要な身分だ。俺が会ってあの子にもしなんかあればもう今度こそ自分を許すことが出来なくなっちまう。ただ…」

そこまで言って男は言葉を濁らせた。

「手紙の返事をちゃんと書いてやりたいんだ。あんたらならあの子に届けられるよな？」

男はしっかりと二人を見た。品定めするようなその眼の奥には期待の色が混じっているようにも感じられた。

「当たり前やろ！こっちは天下のペンギン急便様やで？運べへんものを探す方が難しいわ！」

勢いよく立ち上がってクロワツサンはその期待に応えた。

「ほな、この番号に連絡してくればいつでも受け取りにくるんで、よろしく願います。」

礼儀正しくお辞儀して二人は事務所を後にした。

「ねえクロワツサン？」

「ん？どしたんや？」

龍門の表通りに出た頃、エクシアは何かを決心したような口ぶりで言った。

そしてエクシアの言葉をクロワツサンは言わずとも分かっていた。

「あの人と娘ちゃん、会わせてあげたくない？」

「もちろんや、ペンギン急便の本領発揮やで。」

そう言つてにやりと笑ってみせた。

それから男から連絡があったのは三日後の事だった。

連絡を受け取ったクロワツサンはすぐにエクシアに連絡して二人は社宅へと集まった。

「で、あの子の場所は特定できたん？」

「任せてよ、何なら今いる位置だつて分かるよ。」

「さすがエクシアやな、いつつもモステイマのこと探してるだけのことはあるわ。」

「もう、そんな人の事を粘着質のヤバイやつみたいに言わないでよー！」
「で、これからどうすんのさ。まさか堂々と誘拐するわけじゃないよね。」

「……そのまさかや。」

クロワツサンがそう言うのとエクシアは見る見る内に青ざめていった。

それを言うなら特定も立派な犯罪じゃないかと突っ込みたくなるが言ってしまうとまたややこしくなるのでグツとこらえた。

「そんな……私まだお縄に付きたくないよ!!もう手紙だけにしようよ！」

「大丈夫やって、ちょっと人の子をお借りするだけや。すぐ返せばなんも言われんで。」

「……もう、もしなんかあったら全部君のせいにするからね！」

いやいや運転するエクシアの車に揺られること数十分、都市部からは少し離れたアパートの前で車は止まった。

「この203号室にあの子はお母さんと二人で暮らしてる。でもお母さんは仕事に行くから普段家にはほとんど居ない。だから家の中に人がいる可能性は考慮しなくていいよ。」

「オツケー、ほなミッション開始と行きますか！」

気合も十分にクロワツサンは勇み足で車を出た。

可愛い贈り物④

クロワツサンが女の子の家のインターホンを押すとすぐに中からドタドタと足音がした。やがて勢いよく戸が開き女の子がヒョイと顔をのぞかせた。

「あーゆうびんやさんのおねえちゃんだ！もしかしてパパからおへんじがきたの？」

「その通りやー！ようわかったな！」

「ほんとに!?やったー！」

少女は喜びの余り今にも飛び跳ね始めそうだった。しかしここで彼女に満足されてしまっただけはいけない。クロワツサンは次の一手を打った。

「なあお嬢ちゃん、せっかくパパからお返事貰えたんや、会いに行きたいと思わへんか？」

そう言うと少女の顔が少し曇った。大方いつか帰ってくる母にバレないか心配しているのだろう。

「大丈夫、ママが帰ってくる前にここに帰ってくればただのおつかいとやってることは変わらへん。」

「でも、もしバレちゃったら……?」

震えた口調で怯えるように少女は言った。

「そんな時は……うちも一緒に怒られたるわ!どや?これで怖くないやろ?」

クロワツサンの言葉に安心したのか少女の顔が明るくなった。

「ほんとに?やくそくだからね!」

「で、お嬢ちゃん。お母さんはいつくらいに帰ってくるんや?」

アパートの階段を並んで降りながら尋ねた。

「うーん、なんじかはわかんないけどだいたいゆうがた!」

正確な時間じゃないのはまだ時計を読める年齢じゃないからだろう。その事に若干の不安を覚えつつもクロワツサンは腕時計に目をやった。長針はまだ二時を指している。時間は余裕だ。

「こんなところ誰かに見られたら通報じゃすまないよ。ほんとにバレてないんだよね？」

アパートを後にして車に乗った時、運転席のエクシアが心配そうに聞いてきた。どうもまだ不安なようだ。

「大丈夫やって、それにこんな美少女が誘拐なんかするような顔に見えるか？」

「そういう問題じゃないってばー！」

そう言いつつもエクシアも元々は少女とお父さんを会わせなかったわけでそれ以上は何も言わずにアクセルを踏み込んだ。

向かうは龍門の裏市街、マフィアの巣窟だ。

最近はやりの龍門地下アイドルのアルバムが一枚、終わらない内に車は目的地に到着した。

「ここにおとうさんがいるの？」

陰鬱とした雑居ビルを前に女の子は少し怖気づいている様子だった。そんな彼女の手をクロワツサンは優しく握った。

「安心しい、うちの会社は運んだものを絶対に落とさんことで有名なんや。お嬢ちゃんだつて例外ちゃうで！」

そう言おうと安心したようできゅつと手を握り返してきた。

事務所の前のインターホンを押すと前回とは違いボスが直々に出迎えに来てくれた。

「おう、待ってたぜ。手紙は……」

男はそこで言葉を失った。眼下に写る少女の顔を見てただ静かに涙を流していた。

「お前たち、この子をどうして……」

「いちいち往復すんのも面倒やからな、直接連れてきてもうたわ！あ、ここに来るまでちゃんとバレんように来たから安心してな。ペンギン急便の名にかけて。」

そう言おうと男は人目も憚らず少女を抱き上げた。

「どうもそつとしてあげた方がよさそうだね。」

エクシアが静かに言ったので二人は男の部下に頼んで別室に移動した。

それから親子が入室してきたのは一時間ほどしてから的事だった。

「もうええんか？」

「ああ会えただけでも大満足だ。」

そう言った男の表情はとても幸せそうであった。

「みてみて！これパパからもらったの！」

満面の笑みで駆け寄ってきた少女の手には封筒が握られていた。

「じゃあ、その子を安全に返してやってくれよ。」

男が部屋を後にしようとした時女の子が駆け寄って行って男の足を掴んだ。

「パパ！また遊ぼうね！」

「……ああ、またな。」

娘の頭を撫でる男の顔はただの親の顔だった。

「おねえちゃんたち、きょうはありがとう！」

何事も無く女の子を家に送り届けた頃にはすでに日が暮れていて制限時間ギリギリだった。

「いえいえ、これくらいお安い御用やで！」

そう言ってクロワツサンは女の子の頭を撫でた。

「これからもペンギン急便をよろしくな！」

青く燃ゆる心①

「んんんん〜海だあ!!」

飛行機の長旅から解放された喜びからかシエスタに上陸するや否やエクシアは背を伸ばして叫んだ。

「おいおい、仕事だつてんのにずいぶんと楽しそうじゃねえか。これで俺がもしこの地で死んだらお前の責任だからな？」

「もう、ボスはその様な簡単に死ぬような男じゃないでしょ？それにせつかくシエスタに来たのに一回もビーチに行かないなんてマフィアの居ない龍門と一緒にだよ？」

エクシアがそう笑って返すとボスもそれもそうだなと笑って言った。

海に囲まれた観光都市シエスタ。

そこで毎年開催される音楽の祭典、黒曜石祭。それが明日から開催されるとあつて街は活気に満ちていた。

「ほら来た！ほら来た！こつちにはウイスキーにビール、タピオカだつてあるよ！」

「はあ……みんな商売頑張つてはるなあ、あれ見てるとうちも露店出したなつてくるわ。」

客引きの声が活気良く飛び交う中でクロワツサンは一人大きくため息を吐いた。

「もう、クロワツサンさんはどこ来てもお金儲けの事ばかりだね！そんなんじゃせつかくのシエスタも楽しめないよ〜？」

「あんたはアイドルの稼ぎがあるからええやんけ。ウチなんかペンギン急便の収入だけで頑張つてるんやで？稼げるときに稼がな欲しいものも買えんなるわ。」

ソラの言葉のため息交じりに答えた彼女は邪念を断ち切るように露店から目を背けた。

実際に黒曜石祭の期間中は観光客も露店を出していいことになっている。クロワツサンも観光で来ていたのなら迷わずそうしていただろうが今は真面目な仕事の最中、そんなことをしている暇はない。

「エンペラー様とそのお連れ様ですね。お待ちしておりました。中へどうぞ。」

「おう、ご苦労さん。」

空港から歩いて十分もかからないところにあるそのホテルは海辺に面しており立地的には高級ホテルに位置するだろう。それは内装も例外ではなくエントランスには天井に大きなシャンデリアと宗教画の様なものが描かれており入ってきた者に高貴な印象を与えている。

「各自荷物を置いたら俺の部屋に集まってくれ。当日の作戦を確認するからな。」

そう言ってボスは部屋の鍵を四人に渡した。

観光都市に似つかない「作戦」という言葉。というのもこの町にペンギン急便が来たのはある仕事を完遂するためであった。

黒曜石祭に参加するボスの護衛。これが今回ペンギン急便に課された使命であった。

ペンギン急便を束ねるボスは普段エンペラーという名前で音楽活動を行っている。その影響はすさまじくエンペラーによって今のヒップホップ界が一步上のステップへ進んだと評するものも少なくない。

その音楽活動の一環としてこの度、黒曜石祭に出演することになったのだ。

「で、結局私たちは今回どう動けばいいの？」

ボスの部屋にはペンギン急便の面々が集っていた。その中で一番に声を上げたのはエクシアであった。

「まずテキサスとソラは俺のパフォーマンス中にバックグラウンドで待機していてくれ。エクシアとクロワツサンは場内の警備を頼む。」

「了承した。」

テキサスのその言葉を聞くとボスは腰かけていた椅子からヒョいと飛び降りた。

「言いたいことはそれだけだ。明日は朝七時にここのエントランスに迎えの車が来る手筈になっている。それまでは各自自由行動だ！」

そう言ってボスは部屋を出ていった。

青く燃ゆる心②

「海だああ!!」

シエスタに到着した日の昼下がり、ペンギン急便の面々はホテルを出てすぐのビーチへと遊びに来ていた。

「あつ、ちよ、エクシア待つてーな!」

エクシアは海を目の前にした途端に駆けていった。そしてすぐにクロワツサンがその後を追う。

「ふふつ、お二人とも楽しそうですね。テキサスさんも水着持つてくれば良かったのに。」

「いや、私はいい……」

他のペンギン急便の面々は皆水着を着ているのに対してテキサスはTシャツに短パンといった格好だった。

「あ、もしかしてテキサスさん、カナヅチなんですか?」

「……うるさいぞ、ソラ。」

テキサスは顔を赤らめて言った。

午後三時のビーチはかなり賑わっていて多くの人が行きかっている。さつき駆けていった二人ももう既に見えなくなってしまった。

「なあソラ、アイスでも食べないか?」

「良いですね! あっちの方に屋台があるみたいなので行ってみましょうか。」

ソラはその提案に二つ返事で答え二人はビーチ沿いを歩いた。

屋台の周りにもたくさん人が居て皆思い思いに黒曜石祭の前日を楽しんでいる。

「テキサスさん何味にします?」

「そうだな……チョコで。」

「じゃあチョコとストロベリーのダブルを二つ、お願いします!」

「それにしても意外ですねー、テキサスさんが泳げないなんて。」

「ソラ、その話はもうやめにしてくれないか……?」

アイスを買った二人は屋台の近くに設置されたベンチに並んで座った。

「そんな恥ずかしがるような事じゃないですって、今時泳げない人なんて幾らでもいますよー」

「そうだよ、テキサスが泳げない事なんて大したことじゃないさ。」

「ですよね……って、ええ!? モステイマさん、何でここに居るんですか!?!」

モステイマと呼ばれた青髪の女はいつの間にか二人の間に立っていた。

彼女もまたテキサス達と同様にペンギン急便のメンバーであるが普段はトランスポーターとして放浪している。実際に二人がモステイマと最後に会ったのももう半年ほど前になる。

「やあテキサス、それにソラ、久しぶりだね。」

「モステイマ、何故ここに居るんだ?」

「あれ?もしかしてボスから聞いてない感じ? 今回の護衛作戦、私も参加するんだ。」

そんなことは作戦会議の時に聞かされては居ない。恐らくちしたことではないとボスの中で判断されたのだろう。

「モステイマ、エクシアがずいぶんと寂しそうにしていたぞ。」

「らしいね、ボスにも言われたよ。」

エクシアとはペンギン急便に入る前から繋がりがあつたらしくひどく仲がいい。

「で、私も話に混ぜてよ。テキサスが泳げないんだっけ?」

「頼む、もうその話はやめてくれ。」